恩師・先達・旧友の追憶

高田瑞穂

第一章　恩師の追憶

(1)

辰野隆先生が、助手中島健蔵氏等を後に従えて、堂々と教室に入って来られた。時は昭和六年三月、東大国文学科入学試験の折のことである。私は静岡高校の文科丙類、即ちフランス語を第一外国語とした科を終っていたので、外語試験はフランス語で受けた。その試験場に、当時の仏文科主任教授の辰野先生が登場されたのである。その時の先生の風貌は、正に威風堂々としておられた。やがて先生は壇上に立たれ、朗々と問題文を読み始められた。受験生一同は、問題文を凝視し続けた。するとその時、先生は突然ある語を読み違えられた。受験生の間から、笑いが生じ、廣がった。すると先生は、厳然として「もとい」とおっしゃって、もう一度初めから読みかえされた。そして壇上を下りて出口に向かわれたが、突然、くるっと向きを変えられ、受験生に対して次のように告げられた。

「最近、フランス語は点が甘いという噂が流れている。今年からは点を厳しくする。」

受験生一同がこの宣言に一瞬シーンとした次の瞬間、先

生は急に右の手首をブラブラと振り、「うそだよ！」とおっしゃって、部屋を退かれた。教室には再び笑声がわき上った。しかしそれは、決して暗い声ではなかった。試験終了後教室を出た受験生たちが笑いながら告げあったことばには、一つも怒りはなかった。

「いいなあ！　大学は……」

「大学って、面白いなあ！」

私の受けた印象も、その通りであった。辰野先生のこのときの態度が、前から計画されたものでなかったことは言うまでもない。そしてそれが、受験生の内に、大学への憧憬を生ぜしめたということは、誠に無視できない教育の成果である。辰野先生の人格、人間性の広さと深さとが浮かばずにはいない。その印象は、それから五十六年の時の流れた今日も、私の内にある生動を示し続けているのである。

（2）

昭和六年に入学した我々国文学科学生にとって、一番恐ろしい存在、まぎれもなく厳父であられたのは、主任教授の藤村作先生であった。その対極に立たれたのが、助教授久松潜一先生であった。我々より十六年長の久松先生は、我々の兄上であった。私自身も、時に我儘なことを言って先生を困らせ申したこともあった。しかし、久松先生は常に温かく我々を導かれた。特に私の仲間にとって有難かったことは、先生が「日本近代文学評論史」を講ぜられたことであった。数年前から漸く多少認められてきた近代文学研究が、先生のこの開講によって公認される……これが私たち仲間、近代文学研究を目指していた連中の何よりの喜びであった。しかし、卒論のテーマを藤村先生が御認め下さるかどうかという不安は消えなかった。特に、現に文壇で活躍しつつある作家を対象とする卒論が、御認め頂けるかどうか。そこで、単独で伺うことは恐かったので、私たちは五、六人一緒に、藤村先生の御宅に伺った。その時の藤村先生の風貌は、今も記憶に止っている。この時先生は我々を客間に御通しになり、明るいお顔で我々の卒論の主題を全部お認め下さった。杉森久英は「正宗白鳥研究」、酒井森之介は「泉鏡花研究」、そして私は「谷崎潤一郎研究」であった。すっかり喜んだ我々は、先生を囲んで、楽しく話し合う機会を得たのであった。その時、私ではないが誰であったか忘れた、一人が、「先生はえらいなー、あ

んなに沢山の浮世草紙を全部御読みになったのだから。」と告げた。この年、昭和八年度先生は「浮世草紙研究」を講ぜられていたのである。すると先生は、はっきり、次のように答えられた。

「あんなつまらないものを読むか！」

我々一同は、瞬間驚いて口を閉じた。そしてその日玄関を出るとき、先生はニコニコされつつ、厳しい口調で次のように告げられたのであった。

「近代文学をやるものも、古典を読め！」

この訓辞の意義は、年とともに次第に解ってきたのであった。有難い訓辞であった。

（3）

当時の東大国文学科のもう一人の先生は、国語学の橋本進吉先生であった。多分二年の時だったと思う。「助動詞の研究」という先生の御講義を、学生一同文字通り傾聴した。その頃、橋本文法は、日本全体を支配する権威を示していた。そういう橋本先生の熱意のこもった、精細な論考を、私も眞剣にノートし続けた。そういう橋本先生が、大分講義の進んだ時点で、ある時、講義の終られたところで、壇上に直立されて、学生に次のように告げられた。

「学生諸君に一つ御願いがある。今自分はこの講義を続ける上で一つの壁にぶつかった。それを乗り越えることは、一週間では出来ないと思う。だから来週は休講とする。そのことを認めて呉れ。」

そう告げられた先生は、壇上から我々に頭を下げられた。その時の我々の緊張感、我々一同は先生に向って最敬礼をした。こんな大先生が、ギリギリの高次元において我々に講義され続けたのだという実感、これは断じて私だけの印象ではなく、全員のものであった。

この時の印象と併せて、もう一つ私の心に滲みついた橋本先生の印象がある。先生は煙草が御好きで、当時我々学生一般の吸うバット——七銭の五、六倍もする外国煙草を吸っておられた。ある時、赤門前の煙草屋へ、仲間三人でバットを買いに入った。すると先生が、ウェスト・ミンスターだったと思う、外国煙草を買っておいでになった。仲間の一人がその時、先生の御耳にも入るような声で、「先生はいいなあ、あんな煙草を吸って！」と言った。すると先生は、こちらに顔を向けられニコ〳〵されながら「一本ずつあげよう」と、一人一人に一本ずつ下さった。我々も

ニコ〳〵しながら、有難くそれを頂いた。

＊

昭和九年以来教壇に立ち続けて今日に及んだ私の生を支えた、有難い恩師の追憶、そこから私の内に教えるもののイデアが生じたのであった。

厳しさと温かさとの融和、そして全力投球――この私のイデアを現実に御示し下さった先生方の風貌、それは私にとって何物にも換え難い恩恵であった。

「先生！　有難うございました！」

第二章　先達の追憶

私達十数人が、第十一次『新思潮』を創刊したのは、昭和七年五月、私の大学二年の時のことであった。

『新思潮』は、周知の通り、第一次から第十六次まで続いている。第一次の創刊は、明治四十年十月、最後の第十六次の廃刊は、昭和三十九年五月であった。しかし、第一次『新思潮』は、小山内薫を主宰として潮文閣より刊行された文学誌で、第二次からが同人雑誌であったが、そういう第二次『新思潮』の編集発行人も、一次の場合と同じ小山内薫だったので一次も同人雑誌と見ることとなったのである。第二次・第三次の同人は、総て、一高・東大という学歴を持ったものであった。第三次の同人菊池寛は、京大出身であったが、仲間の芥川龍之介等が同人になることを認めたのであった。そのことを一契機として、次第に、一高・東大という前提は無視された。そして時の流れに従って、第十五次には、曽野綾子・有吉佐和子等女性も同人となっていた。

私達第十一次『新思潮』の同人等は、その創刊号が出たとき、それを『新思潮』同人の先達たちに御とどけしたのであった。その頃の我々大学生の気儘さ、先達の御宅を訪れる時は、午前十一時であった。何故なら、その時御伺いすれば、必ず晝食の御馳走が出たからである。そういう私等にとって、最初に御伺いしたかったのは、第二次の大先達谷崎潤一郎であったが、その頃関西にお住みだったのでやめて、第三次の豊島與志雄・松岡譲の二先達邸の訪問から始まった。そういう先達訪問の中で、特に強い印象が今も消えないのは、第六次の川端康成邸の風貌である。そのことだけを記すこととする。

角帽をかぶった五・六人が、上野桜木町の御宅に伺った

時、私達を客間に御通し下さって、私達の前に、次々に御馳走をおはこび下さったのは、川端先輩ではなく奥様であった。ところが、そういう奥様に少しも目を向けず、また私達の言うことも殆どお聞き下さらなかったのが川端さんであった。昭和七年には数え年三十四歳の、私達より十歳ほど年上の川端さんは、あぐらをかき、その膝の上に小犬を置いて、両手でその毛を掻き分けながら、虫をとり続けていた。時々こちらの言うことに対して、「そうだね」とか「何を言うか」とかつぶやくだけであった。御馳走を存分にいただいて、川端邸を出た私達の間に交されたことばは、次の通りであった。

「つまらんなー、こんなつまらん家へはもう二度と行かない！」

私達がそういう体験をした翌年の昭和八年七月、中期の名作「禽獣」が、『改造』に掲げられた。その一節を引く。こういう表現に接して、私達は、「禽獣」の主人公は正に川端さん自身であることを痛感したのであった。

「彼は客に会うのにも、身辺から愛玩動物を放したことはなかつた。相手の話はろくろく耳に入れないで、駒馬の雛に手を振りながら指で餌を与えて、手振駒の訓練に夢中であつたり、膝の上柴犬の蚤を根気よくつぶしたり、『柴犬は運命論者じみたところがあつて、僕は好きですよ。（中略）』

そうして、客が立ち上るまで、相手の顔を見ようともしないことが多かつた。」

こういう川端さんの場合の対極だったのが、第八次――第十次の深田久弥さんの場合であった。

明治三十四年に生れた深田さんは、私等より九歳ほど年長、昭和七年には数え年三十二歳であった。この年の十一月に「あすならう」を『改造』に発表し、これが文壇登場の契機となったが、私達の訪問はその直前であった。生活を支えるために、改造社に勤めておられた時であった。今も記憶に止っていることは、その時晝食がわりに、大きな笊に、大きな塩煎餅を山のように盛ったものが私達の前に出されたことであった。

「これしか出せない。どうぞ食べてくれ。」

私達一同は、バリバリ煎餅を食べながら、深田さん自身もバリバリ食べながら、文学をめぐる論争が続いたのであった。正に侃々諤々なる論争であった。深田さんを中核にして我等相互の論争も続いた。「何を言うか！」「そう

だ、そうだ。」そういう深田さんは、私達にとっては、正に仲間の一人であった。

この日の印象は非常に楽しく、「面白かったな。」ということばはこの日の帰路において誰もが口にしたのであった。ここから国文学殊に近代文学研究の先達に筆を転ずることとする。

昭和九年卒の東大国文科の中で、近代文学に関心の強い――私もその一人――連中にとって、文字通り先達であったのは、片岡良一・塩田良平の御二人であった。

片岡さんは、明治三十年誕生、大正十四年東大国文科を卒業された。塩田さんは、明治三十二年誕生、昭和二年東大国文科を御卒業。御両人とも、私達より十余年の先輩であった。

この御二人のうち、私達に、近代文学専攻の私達に、大きな影響を与えたのは、片岡さんであった。昭和十四年に大著として岩波書店より刊行された『近代日本の作家と作品』、そこに集録された諸篇は、私達にとって何よりも有難い手引きに他ならなかった。私達は塩田さんの『近代日本文学論』（昭和一〇）は余り読まなかった。この御二人相互の関係は決して温柔なものではなかった。そういう事実に関する私の、今にも内に止っている印象は、片岡さんの発言に対しては、塩田さんは「何を言うか」とくりかえされ、塩田さんの発言に対しては、片岡さんは同様に「何を言うか」をくりかえされたことである。そういう御二人の中間に在って、そういう二人の離別を防いだ存在は、これも先達の一人湯地孝さんであった。湯地さんは明治三十三年のお生まれ、片岡さんより三つ下、塩田さんより一つ下、非常に温柔な御方で、不断に対立を続ける片岡・塩田を結び続ける中間的存在であった。小生にとって面白い人間的眞実の一つは、こういう重要な中間的存在自身の書かれるものには、あまり魅力が無かったということである。このことは、例えば新感覚派の場合もその通りであった。横光利一と川端康成との不調を中間的存在として支えた中河与一氏の作品は、横光・川端両氏に比べて魅力のかいたものであった。中途半端であった。

もう一つ告げたいことは、私達の間に、片岡さんは左翼、塩田さんは右翼ということばが流れたということである。周知の通り、昭和初年代中期は、左翼全盛期であった。しかし昭和六年に始まった満州事変を契機として左翼的なものへの政府の弾圧が強まり、プロレタリア文学の中

核であった小林多喜二が虐殺されたのは昭和八年のことであった。この出来事は、私達学生には、左翼的なるものへの関心を強めるものとなった。

錯雑した「先達の追憶」はここで終ることとし、ここから「旧友の追憶」に筆を転ずることとする。

第三章　旧友の追憶

小生の内に今日も依然として生存し続ける旧友の追憶を、数々ある中の幾つかを、気儘な表現で記すこととする。

＊

去る昭和六十年六月九日に、吉田精一氏が逝去された。その時通夜には小生も参上した。その席上で久しぶりに御会いした奥様と、昔話をした。そして故人の横たわっている直前で、二人とも笑ったのである。その話は次のような内容である。

吉田さんは私より二級上の同じ国文科、ある時私は、下町の吉田さんのお宅を訪れた。吉田さんは喜んで迎えてくれた。その時、女中さんがお茶を持ってきてくれた時、吉田さんは次のようなことを言って女中さんを叱った。

「おい、学生さんでもお客さんだぞ。何故もっと善い茶碗にしないのか！」

女中さんは黙って頭を下げた。その女中さんが、玄関を出て帰る私の傍に寄ってきて、私に次のように告げた。

「学生さん、あれがうちの一番いいお茶碗なのですよ。それをよく知っているのにね！」

私は非常に面白い感銘を受け、今もそのことを忘れない。

五、六年前、私は吉田さんに、近く「旧友の追憶」という随筆を書く、その中に、右の女中さんを叱るあなたのことも書く、と言ったら、顔色をかえて、「いかん！　あんなことを書いてはいかん。」と私を叱った。その吉田さんが、それから二年ほどした時点で、あのことを書いたか、是非書いてくれと告げた。晩年の風貌に他ならない。

東京下町生まれの吉田精一氏は、先達の谷崎潤一郎につながる「下町の異端者」だったのである。

＊

私が府立一中教諭になったのは、昭和十六年五月のことであった。昭和九年に教諭となった私の教師生活も、既に

八年目であった。そういう私が、始めて一中に姿を見せた時、私の前に来て、「よく来てくれた。有難う。」と告げたのが、川副国基氏であった。そしてこの時の出会いが、昭和五十六年の川副氏の死まで不断の交友の始点であった。川副氏は私より一歳上の九州男子。川副氏が府立一中教諭であられたのは、昭和十三年十月から十七年四月までであった。私は、十六年五月から二十一年三月までであった。二人が共に一中教諭であったのは、一年足らずであったが、この一年足らずは実に楽しかった。その頃一中には、文学に関心の深い川副・高田両人の先達江南文三先生が、英語を教えておられた。周知の通り江南先生は、明治四十三年以降、石川啄木の後を受けて『スバル』編集に当られた方であった。その江南先生をかこんで、昔の文壇の話を数々聞かされ、非常に楽しかった。そういう楽しい生活の中で、ある時、川副氏は顔色を変えて私に訴えられた。それは、自分は早稲田の第一高等学校に来るように告げられた。一中の方が楽しいのでどうしたらいいか、君はどう考えるか？　と質問された。その時私は次のように答えた。今もおぼえている。

「川副君、何を言うか。早稲田は君の母校ではないか！」

すると川副君は、暫くして答えた。

「……うん、そうか。」

この昭和十七年から、五十四年までの川副君の早稲田時代はここから始まったのであった。

私自身も二十一年に一中を退いて、成城学園に転じた。そういう私に、是非早稲田の教育学部に講師として来るようにと川副君が命じたのは三十二年のことであった。その頃川副君は教育学部学部長であった。今こちらには「近代詩」の講義の出来るものがいない、是非やってくれという命令であった。私は、弟の一人が早稲田文科を出ていたこともあって、喜んで承知、月曜日に「日本近代詩史」を講じた。まだ数え年四十八歳の私は数多い早大生に、思う存分の講義をしたところ、非常に熱心に聞いてくれた。その印象がよかったので、私の講師勤務は、二十五年も続いたのであった。二十五年間、全部月曜日とした私にとって、月曜日は正に「早稲田デー」であった。そして一中時代からの川副君との交友は次第に深まり続けたのであった。川副君が『日本自然主義の文学』を刊行されたのは昭和三十二年、私が『反自然主義文学』を刊行したのは三十八年の

ことであった。こういう川副さんと私との論争は、どこまで行っても終らなかった。同時に、その論争によって二人ともそれぞれ、文学に対する開眼を体得したのであった。二人は、そういう論争を続けることに楽しみを覚え続けたのであった。そして、そういう二人の到達点は、文学、特に近代文学研究にとって、最大の要望は、早稲田派の実証性、現実性と、東大派の理論性、観念性との止揚ということであった。これは川副君と私との論争即交友の到達点であった。そういう到達点に即して二人の考えたことは、早稲田派と東大派との会合「文庫の会」であった。川副君の晩年の書『近代文学の風景』（昭和五一年・櫻楓社刊）の一節を引く。それは「茶房主人富安龍雄さんと『文庫の会』」と題されている一文の全体に近い引用である。

「（前略）昭和二十年の四月、五月の空襲で早稲田界隈も廃墟と化した。大学の正門前からずっと焼野原で矢来町の新潮社の建物が見えるだけだった。その焼跡へいちはやく主人（富安龍雄）はまず民芸ふうの家を建てた。床は土間で周囲の壁に棚を設けいっぱい本を並べて『早稲田文庫』と称し、本に飢えていた当時の学生たちに利用させはじめた。

学生を愛し学生をよく世話し、わたしなども主人のたのみでよく名も知らぬ学生の相談相手にさせられたりした。ささやかな庭にすがすがしく竹を植えた主人の風雅さがし、わたしはこの庭に面した畳敷の明るい主人の部屋に目をつけ、高田端穂氏をかたらって、ここで、戦後の新気運に応ずる近代文学の勉強会をはじめることを考えついた。文学を愛する芸術肌の主人の温情に甘えたのである。二十二年八月の打ち合せの会もここでやった。高田氏とわたしのほか、稲垣達郎・杉森久英・松村達雄・中橋一夫の四氏も加わった。九月には柳田泉氏を囲んでのお茶の会をやり、十月から柳田氏の「明治の美学と亀井滋明」という講義で第一回がはじまった。昭和七、八年ごろ東大の明治文学会や明治文学談話会で活躍した酒井森之介・田中保隆・伊沢之美氏らも積極的に参加し、平野謙氏・針生一郎氏らも見えたことがある。わたしたちはこれを「文庫の会」と名づけ、だいたい毎月一回の例会をもつことにしたが、この会はずっとその後二十八年間も続いた。「早稲田文庫」が飲みものや菓子を供する「早稲田茶房」と変貌したように、中年七、八名の集りであった「文庫の会」もその後若い研究熱心な高校教師たちを包合するようになっていった

が、その人たちもいまはすべてそれぞれ立派な大学の教師となって研究界の有力な存在となった。いまにして思うと「文庫の会」は近代文学研究の大学院の役割も果したことになる。（下略）」

川副君の追憶として、今も小生の内に生動し続けていることを付記する。九州男児であるのに、川副さんは酒は殆ど飲まなかった。それでいて酒席に加わることは厭わなかった。ほんの一口飲んで誰よりも話し続けた。そういう川副君に私は度々、「君の奥さんは飲まないか」と尋ねた。その度毎に川副君は、「全然飲めない」と告げたのであった。或時私は、私の家の成城から小田急で近いので梅ヶ丘の川副邸を訪ねた。決してその時が最初ではなかったが、喜んで小生を迎え入れてくれた。そして川副夫人が早速ビールを持ち出して私に注いで下さった。その時私は夫人に聞いた。「あなたは御主人に注いで頂いたことがありますか。」夫人は小声で「いいえ」と御答えになった。川副君は私を叱るように、「飲めないんだよ」と言った。そのことばを聞いて、元気わがままな私は、「そんなことを言わないで、僕の目の前で一度奥さんに注いで御覧、これは最初の歴史的行動だ、是非……」そう言って私は両手を眼鏡にして二人を眺めた。川副さんは仕方が無いという顔で、「そんなに言うのなら注いでやろう」と、奥さんにコップを持たせ、一杯にビールを注いだ。すると夫人は私に向って「いただきます」とおっしゃって、一杯に注がれたビールを、グーッと一息に飲みほしてしまわれたのであった。川副君は驚きの目を輝かした。

このことがあった数日後、川副夫人の御便りがとどいた。そこには、明るい謝辞が記されていて、私も嬉しかった。

「高田さん、ありがとうございました。あの日から後は、主人の前で飲めるようになりました。」

ここから、視点を同窓会に向けることとする。

＊

数年前の秋のことだったと思う。昭和九年に東大国文科を出たものの級会が、浅草の古い店で開かれた。この時の世話役は、多分、市古貞次・鈴木章の両君だったと思う。私達のこの同窓会は、朱門会と名付けられ、殆ど毎回学士会館で開かれ続けたのであったが、この時は浅草であった。何故浅草であったか、それには面白い理由があったの

である。

その頃、昭和八・九年頃は、浅草における榎本健一――〝エノケン〟の人気の盛り上りの時であった。その喜・活劇が面白くって、私達は午後の講義を無視して浅草に出かけたのであった。だから浅草でもようされたこの会で、最初は誰も彼もエノケンのことを回想し、「面白かったな」と告げたのであった。ところが、酒がまわると、話題は一転して、吉原の回想となった。

私の記憶では、吉原は公娼だったので、その一流の店などに角帽をかぶって入ろうとすると、おかみさんに叱られた。「学生さんなど来てはいけません！」しかし、二流三流の店は「どうぞ！」と迎えてくれた。再言するが昭和八・九年は不景気のどん底、しかし昔は合理的で、物價も非常に安かった。その頃は私等はいわゆるアルバイトなど一切しない。お金は全部家から送ってもらっていた。朱門前の大きな屋敷でも、不景気時代なので、部屋に余裕があると、下宿に貸すという札を出していた。その頃は、日本の土地それ〴〵の食物の個性が強かった。だから、その家の食物が口に合うかどうかをたしかめるため、二月は無料であった。三食つきで立派な六畳の部屋をかりて、月十五円というのが、その頃の一般の値段であった。そういう時代における吉原の二流・三流の値段は三円であった。勿論宿ったりするのではない。三円は私達には高かったので、永井荷風の「濹東綺譚」に描かれている玉の井・亀戸の私娼は一円五十銭、そちらの方へ行く者が多かった。しかし私娼の方は、気をつけないと病気、いわゆる花柳病にかゝった。同窓会の連中でも五・六人は梅毒・淋病にかゝった。そういう連中の誰もが口にしたのは、「よかったなー、東大は……」ということばであった。それは、花柳病にかゝると、どの科の学生も医学部に行く。すると、日本一の大先生が、少しも御叱りにならず、十分の手当で直して下さって、お金は一文もいらなかったのである。私は幸にも花柳病にはかゝらなかったが、「よかったなー、東大は……」には讃成であった。十年代に入ると戦時態勢が強まってくる。

静岡高等学校の文丙の会も楽しい。昭和六年卒の文丙の級は、仲々優れた連中がいた。六文丙は全員が三十四名、文甲の方は四十一名であった。その六文丙三十四名のうち東大の文学部に進んだのは、僅かに二名、小生が国文学部、もう一人は倫理学部であった。一番多かったのは十名

の経済学部、次いで法学部の七名で、計十九名が東大に進んだのであった。そういう六文丙の旧友について、今日も印象の消えないことを一二記すこととする。

旧制高校は、一年間は寮生活をしなければならなかった。静高の寮は六畳の間で、そこに二人が入った。小生と一年間同室に住んだのは古屋徳兵衛――そのころは祐次郎であったが、父上が逝去されて、古屋家を継いだ折に、父上の御名をそのまゝに、徳兵衛と改名した古屋であった。その古屋の会社のデパート松屋から歩いて五、六分の東京電力の重役をしていた長島忠雄は、小生の郷里浜松に近い豊橋の出身、それに加えて長島は文学が好きでよく話をした、そういう二人を、小生は散歩に度々出かけた銀座で、いつも今日はどっちが居るかなと考えながら訪ねた。時には二人とも居る時もあり、逆に居ない時もあった。一人でも会うと、お互に喜んで早速一杯飲みに出かける。どちらの場合も、貧乏教師の小生には近寄り難い立派な飲屋であった。盛んに飲み、盛んに話しあって帰る時には、長島も古屋も、一文も出さず、さっとサインをする丈であった。大会社の重役は、一文も自分の懐からは出さなかったのである。

こういう古屋に関して、今も忘れ難いことの一つは、古屋が松屋の社長をしていたとき、松屋を訪ねた小生は、案内所の店員に、「今日は古屋は居ないか」と尋ねた。

「古屋って誰ですか」

「古屋徳兵衛だ！」

「え？　社長を古屋などと言ってはいけません。」

そして、本館の裏にある建物の上の方にあった社長室に居ることを教えてくれた。小生はその建物に入っていった。たしか三階だったと思う。古屋は喜んで小生を迎えてくれた。面白い昔の話を交した後、小生が「買物がある。今日はこれで帰る。」と社長室を出ようとすると、「俺もついて行くよ。」と古屋も一緒に店の方に行った。その時の印象も消えない。古屋と一緒に店の大きい建物の方に入ると、店員一同が社長に最敬礼し、重役の方々も走り寄って頭を下げた。そして小生が注文すると、一番高い品物ばかり持ってきた。小生と古屋とは、こういう会話でこの日の会見を終った。

「古屋！　じゃまた。部屋に帰れ……」

「うん、そうしよう。又来て呉れ！」

言葉とともに古屋が去ると、集っていた店員たちは皆不

思議そうな顔付をして小生に告げた。

「社長を古屋！　と呼びすてるあなたは、どういう方ですか。」

「僕と古屋とはな、静高の寮の六畳の間に一年間一緒にくらした旧友なんだ……」

こういう古屋と、小生が会社に行くとすぐ飲みにつれていった長島の二人が、数年前揃って小生の家を訪ねてくれた。そして二人は口をそろえて、「勲二等になった！」と告げたのであった。

最後に、中学の同窓会について一筆して、この錯雑した一文を終ることとする。

小生は、浜松一中を昭和三年三月、第三十二回生として卒業したものであった。その同窓会がこれは毎年一回あるのであるが、数年前浜松において開かれたとき、勿論小生も帰郷して参加した。その時の会の幹事から数日前、「病気で出られないものが沢山いる、その連中に贈ることとするから、短歌を作ってすぐ送ってくれ。」とたのまれていたので、早速小生は、既に出来ていた二首を冒頭と結末とに置いてそれに三首を作り加えて送っておいた。そしてその会に出たところ、健康で出席している全員にプリントがくばられていた。そしてお互にニコ〳〵しながら、「やっぱり級長はうまいな」と言い、「説明をしてくれ」とも言った。その五首とは次の如きもの、御笑覧下さい。この時の会は、浜一中創立五十周年記念の盛大な同窓会であった。

㈠　行き行けど冷たき風の吹き荒れて
　　何処に在りや温柔の里

㈡　旧友の集い語らふ今日この日
　　わが浜松は温柔の里

㈢　その昔遊び学びし学び舎は
　　三方が原に今も健在

㈣　半世紀過ぎし今も胸中に
　　浜一中の権威は消えず

㈤　老いし身に何より欲しきものぞこれ
　　人と人とを結ぶ温情

この五首の最後の㈤を全員が、「そうだ、そうだ」と言って、合唱した。